

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

1. 令和6年度前期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

令和6年度前期に開講された科目について、各学部・学科ごとに学生による授業評価の結果をまとめた。例年、実習・実験、ゼミ、集中講義などは分析の対象外としており、同一科目のクラス別開講の場合はクラス数でカウントしているため、分析の対象となったのは人間学部97科目、人間生活学部118科目であった。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する11項目（評価基準は1～5点）の計13項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計11項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

設問群①：「授業内容」	3項目の点数合計に対する1項目あたりの平均
設問群②：「授業方法」	5項目の点数合計に対する1項目あたりの平均
設問群③：「総合評価」	1項目の点数合計に対する1項目あたりの平均
設問④：「学修時間」	1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、5h以上）の比
設問⑤：「学修行動」	1項目それぞれの平均

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として9項目の点数合計に対する目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられる場合もあるが、今回は平均を利用した結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、過去の仁愛大学FD推進活動報告書を参照されたい。

1.1 人間学部

(1) 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図1（心理学科11科目）、および図2（コミュニケーション学科12科目）にそれぞれ示した。図1に示された心理学科の学生の延べ人数は352名で、各学年それぞれ1年生=287名、2年生=46名、3年生=19名であった。また、図2に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は392名で、各学年それぞれ1年=261名、2年=93名、3年=19名、4年生=19名であった。心理学科の延べ人数は昨年度よりも減少したが、コミュニケーション学科は増加した。また、過年度と同様、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから、両学科ともに3年生以上の受講数は少なかった。

昨年度と比較して、心理学科では、授業内容はほぼ同様、授業方法はやや低下、総合評価はほ

ほぼ同様であった。コミュニケーション学科では、学年によってバラつきがあるものの、総じて昨年度とほぼ同様であった。

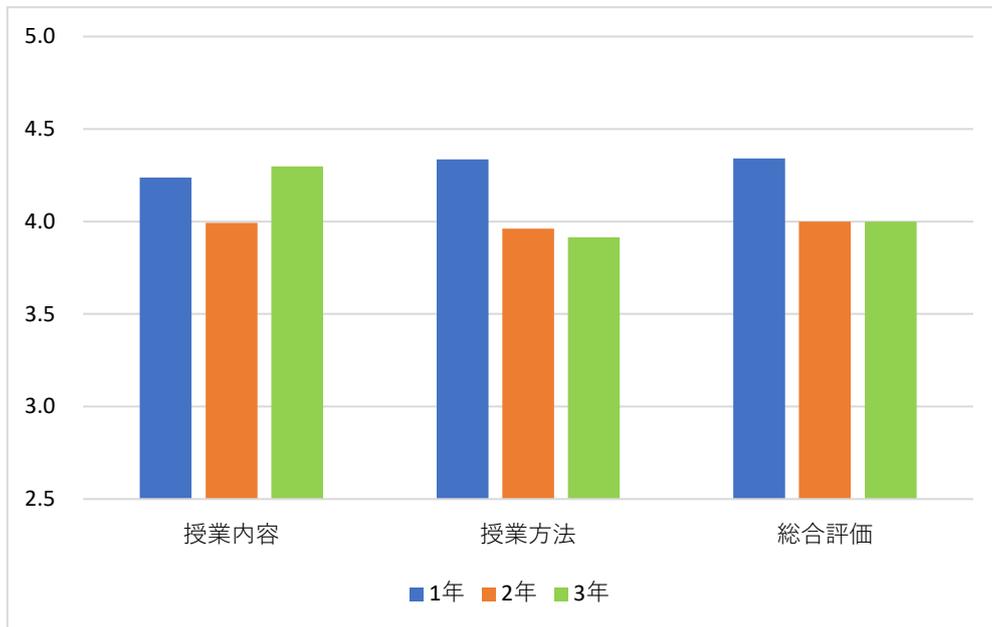


図1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=287名、2年=46名、3年生=19名

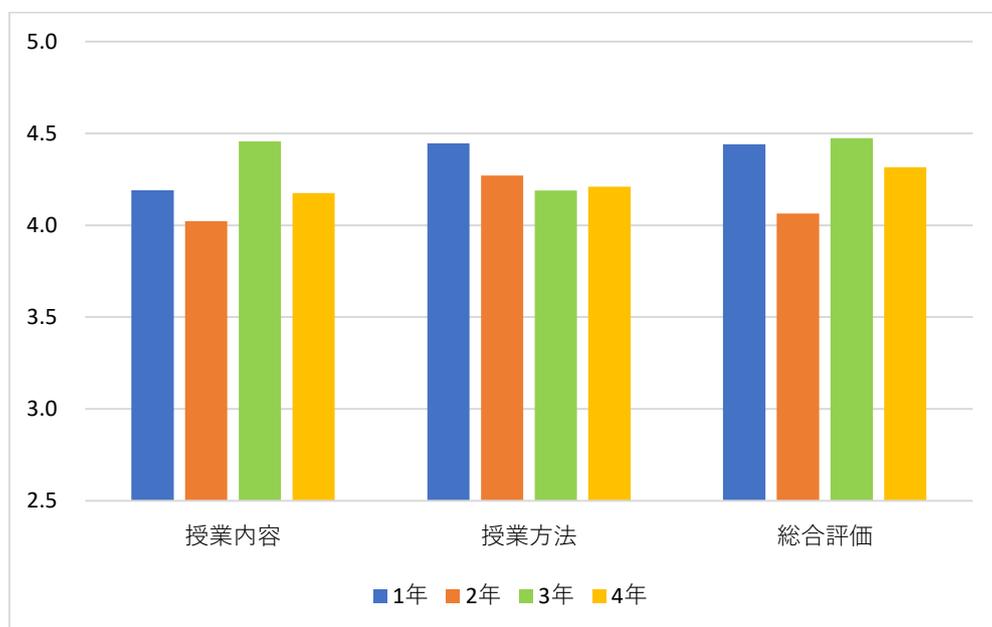


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=261名、2年=93名、3年=19名、4年=19名

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科9科目）、および図4（コミュニケーション学科10科目）にそれぞれ示した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は109名で、各学年それぞれ1年=93名、3年=16名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は153名で、各学年それぞれ1年=105名、2年=38名、3年生=10名であった。心理学科の延べ人数は昨年度よりも減少したが、コミュニケーション学科は増加した。

昨年度と比較して、心理学科では、授業内容はやや低下、授業方法および総合評価はほぼ同様であった。コミュニケーション学科では、学年によってばらつきがあるものの、総じて、心理学科と同様の傾向が見られた。

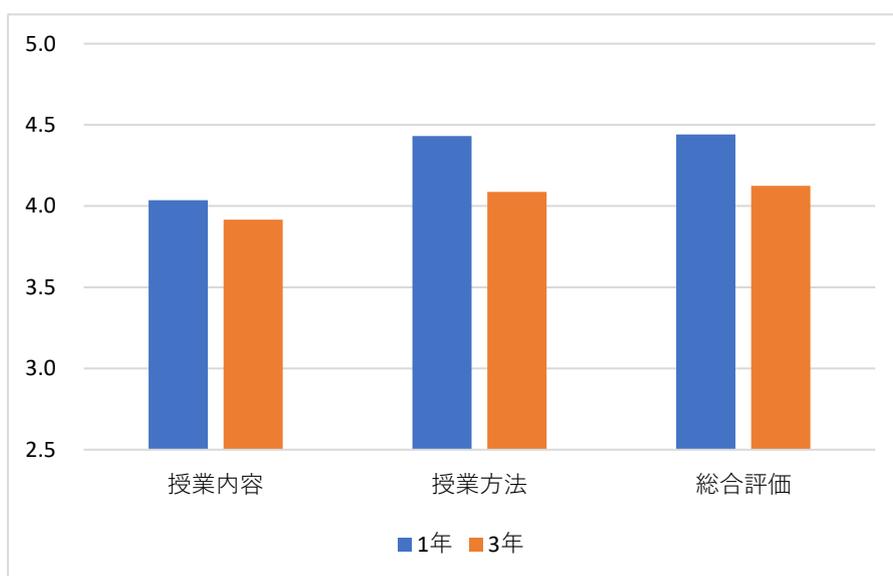


図3 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=93名、3年=16名

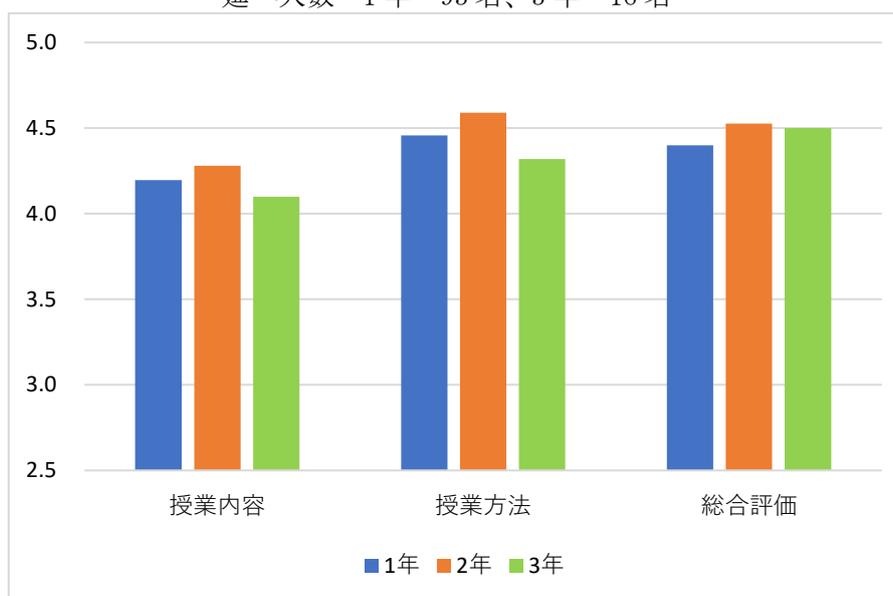


図4 コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=105名、2年=38名、3年=10名

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 26 科目、コミュニケーション学科 38 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 1,225 名で、各学年それぞれ 1 年=148 名、2 年=543 名、3 年=480 名、4 年=54 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 939 名で、各学年それぞれ 1 年=266 名、2 年=392 名、3 年=236 名、4 年=45 名であった。心理学科の延べ人数は昨年度よりも減少したが、コミュニケーション学科は増加した。

昨年度と比較して、両学科ともに、全体として、4 年生の評価が低下し、1 年生の評価が上昇する傾向が見られた。

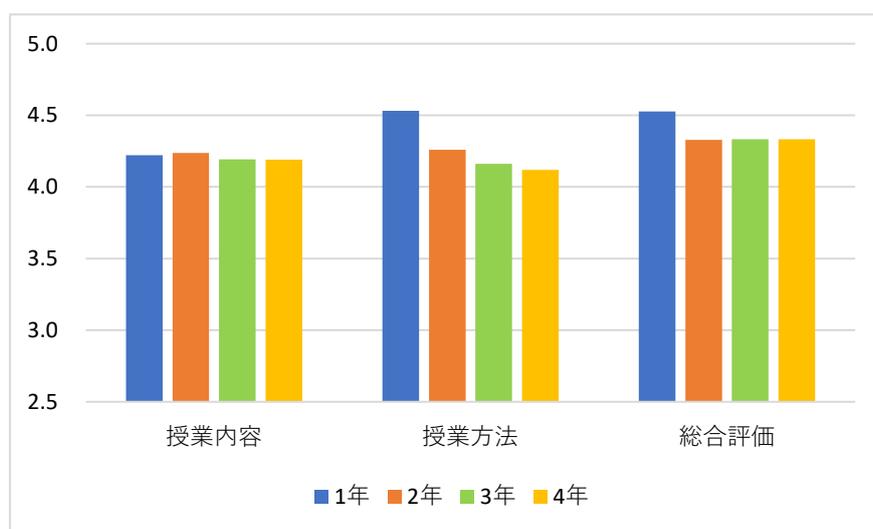


図 5 心理学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年=148 名、2 年=543 名、3 年=480 名、4 年=54 名

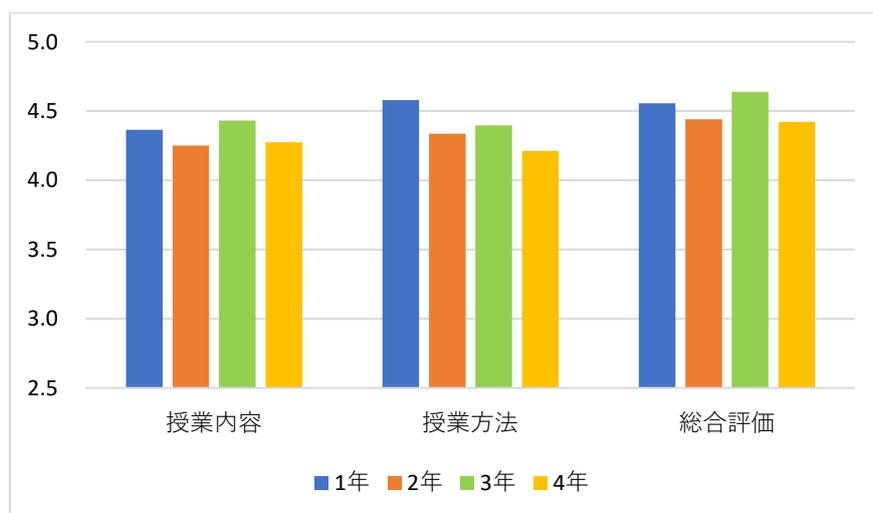


図 6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年 266 名、2 年=392 名、3 年=236 名、4 年=45 名

(4) 学修時間と学修行動

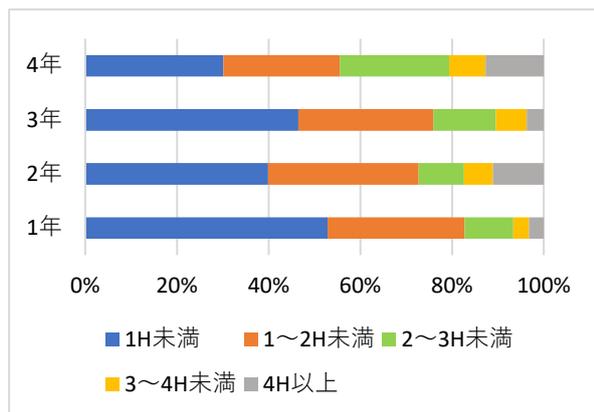


図7 心理学科の授業外での学修時間

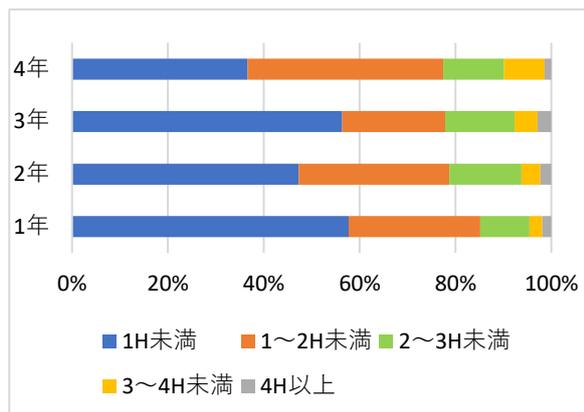


図8 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図7および図8に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、昨年度に比べ、心理学科は学修時間が増加傾向にあることに対し、コミュニケーション学科は減少傾向にある。

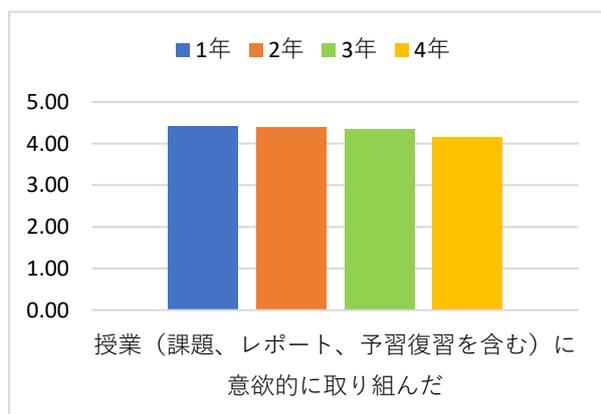


図9 心理学科の学修行動

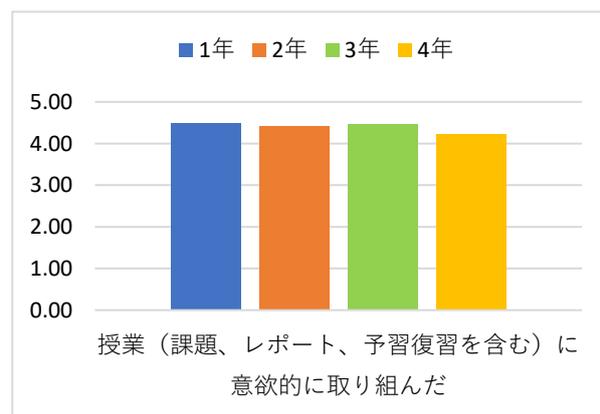


図10 コミュニケーション学科の学修行動

続いて、各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図9および図10に示した。今年度から評価項目が変更となったため、昨年度との比較は不可能であるが、両学科ともほぼ同様の結果となった。

(5) 人間学部のまとめ

本年度前期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。昨年度前期と同様、概ね例年通りであった。COVID-19が5類相当に変更され、規制も緩和された。対面授業の動画をeラーニングにUPするなど、COVID-19蔓延前にはなかった手法による各教員の創意工夫により、授業の質が保たれたと考えられる。より良い授業を引き続き模索していくことが大切であると考えられる。

(報告：小川慶)

1.2 人間生活学部

(1) 共通教養科目

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において7科目から回答を得た（図1参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が113名、2年生が30名、3年生が15名、4年生が1名であった。項目別評価は3・4年生の「授業方法」「総合評価」が高く4.3を超えていたが、1・2年生の「授業内容」が4.0を下回っていた。

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において7科目から回答を得た（図2参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が69名、2年生が25名、3年生が8名、4年生が1名であった。すべての項目で学年差が大きく、1年生はすべて4.0を大きく下回っていた。

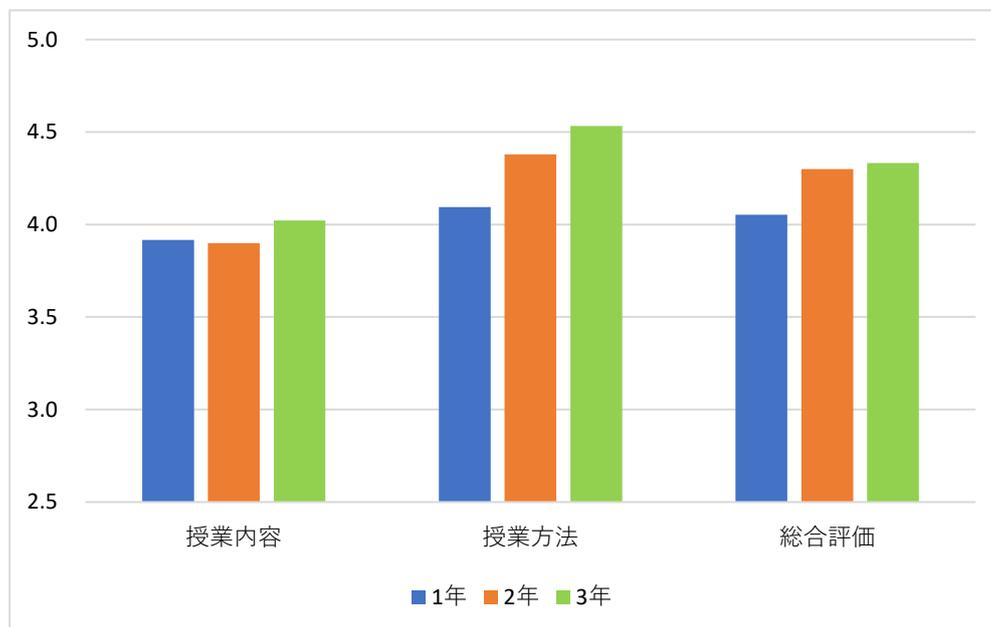


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=113名、2年=30名、3年=15名

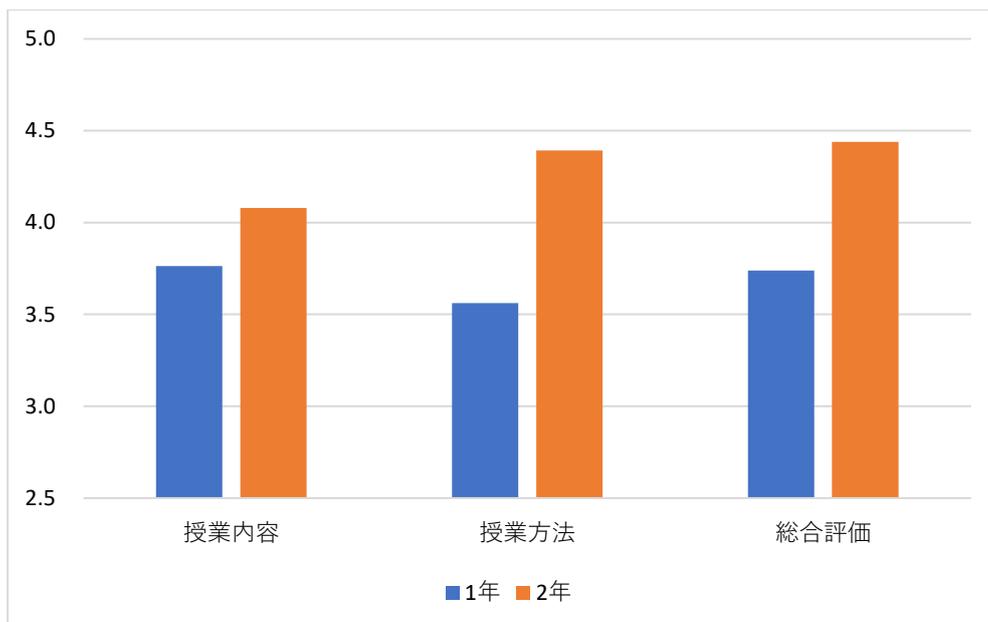


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=69名、2年=25名

(2) 共通語学科目

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において9科目から回答を得た（図3参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が111名、2年生が20名、3年生が3名、4年生が1名であった。

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において9科目から回答を得た（図4参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が81名、2年生が16名、3年生が9名であった。

両学科とも、1年生の「授業内容」が低く4.0を下回っていた。また、全項目で2年生が高く、評価平均値もよく似た傾向であった。

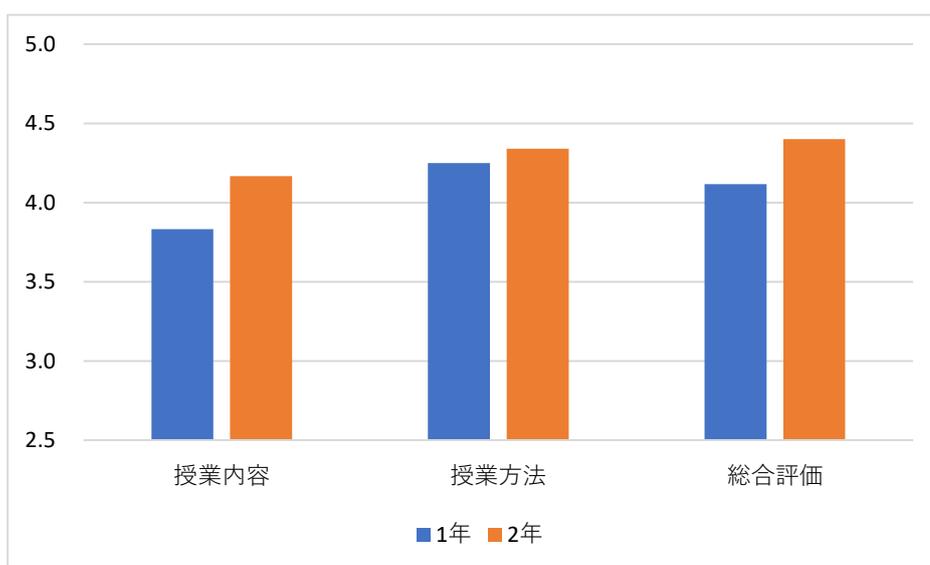


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=111名、2年=20名

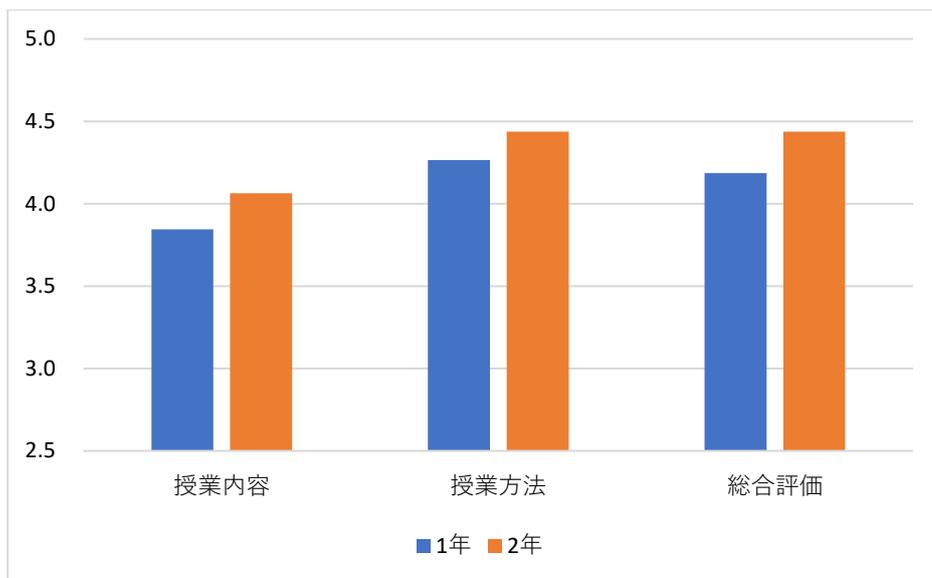


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=81名、2年=16名

(3) 専門科目

健康栄養学科学生が受講する専門科目において43科目から回答を得た(図5参照)。延べ回答人数は、1年生が435名、2年生が268名、3年生が395名、4年生が113名であった。1・2・3年生の「授業内容」を除き、全ての設問の平均点が4.2以上であった。

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、55科目から回答を得た(図6参照)。述べ回答人数は、1年生が301名、2年生が558名、3年生が344名、4年生が100名であった。いずれの項目も3年生が低く、1・2・4年生は全設問の評価が4.5前後と高かった。

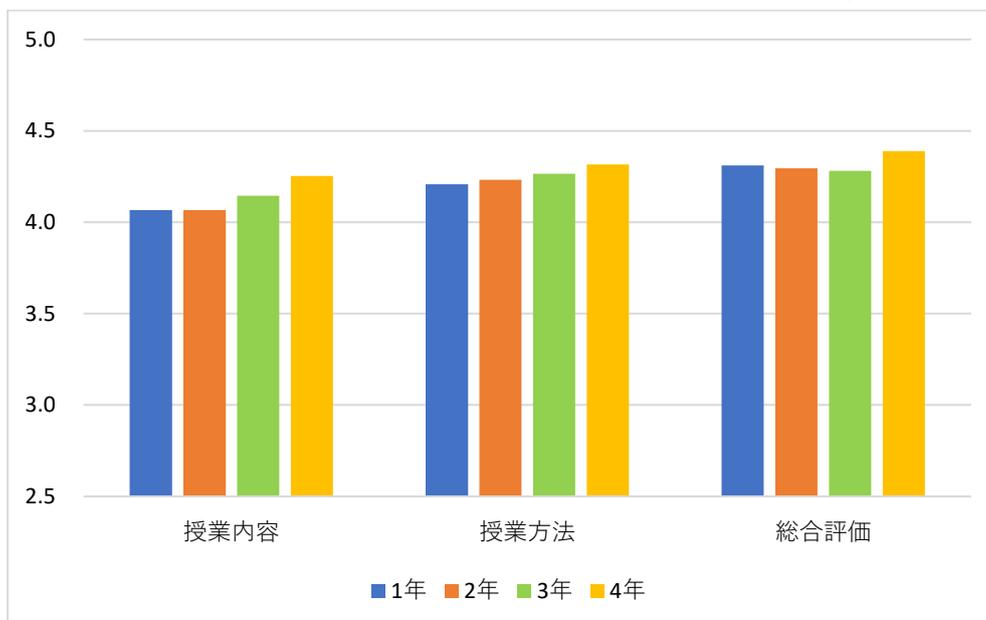


図5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=435名、2年=268名、3年=395名、4年=113名

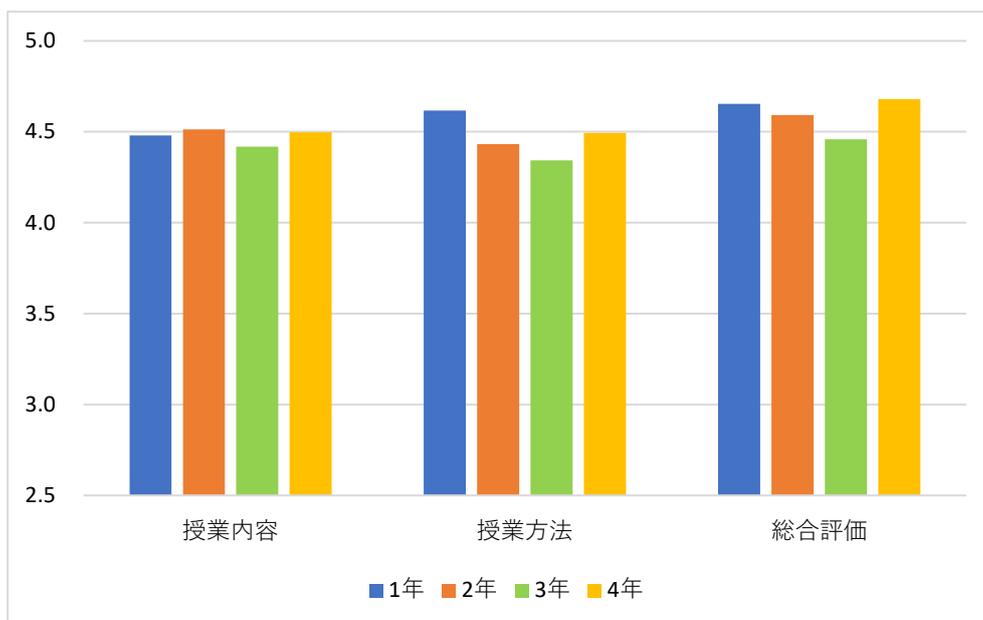


図6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=301名、2年=558名、3年=344名、4年=100名

(4) 学外での学修時間と学修行動

図7は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は1年生が659件、2年生が318件、3年生が413件、4年生が115件であった。授業時間数の関係からか1・2年生では、「1時間未満」、「1～2時間未満」の割合が合わせて80%前後であった。

図8は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1年生が451件、2年生が599件、3年生が408件、4年生が102件であった。3年生では、「1時間未満」、「1～2時間未満」の割合が合わせて約83%と高かった。

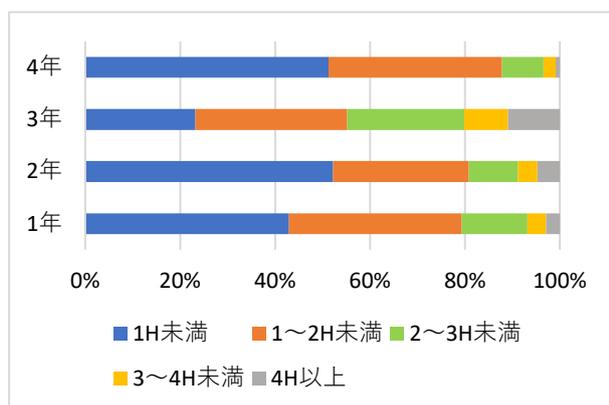


図7 健康栄養学科の授業外での学修時間

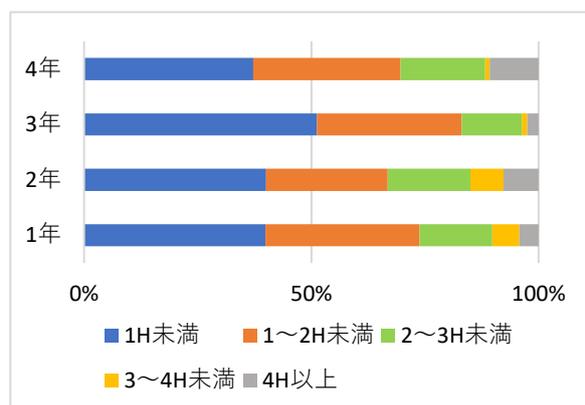


図8 子ども教育学科の授業外での学修時間

図9は、健康栄養学科での学修行動について学年別に比較したものである。3年生が高い値を示した。

図10は、子ども教育学科での学修行動について学年別に比較したものである。学年による違いは、ほぼなかった。

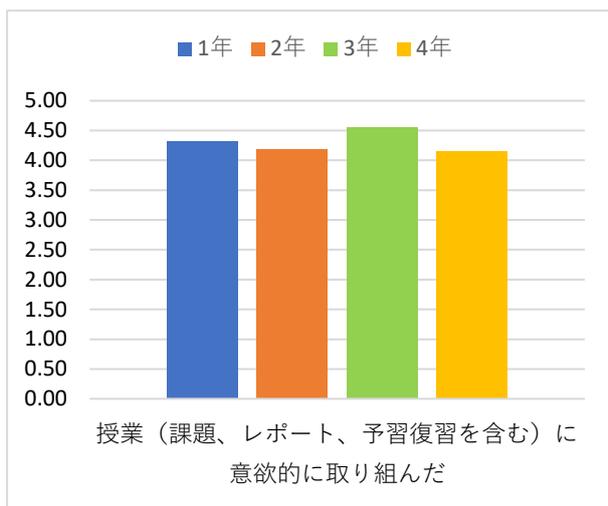


図9 健康栄養学科の学修行動

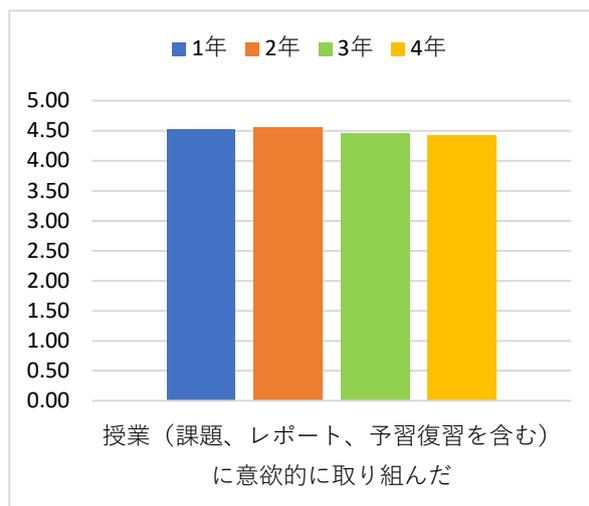


図10 子ども教育学科の学修行動

(5) 人間生活学部まとめ

本年度前期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。学生の多様化や権利意識の変化などに呼応した、授業内容、授業方法の工夫がますます求められる。COVID-19が5類相当に変更され、規制も緩和された。対面授業の動画をeラーニングにUPするなど、COVID-19蔓延前にはなかった手法による各教員の創意工夫により、授業の質が保たれたと考えられる。より良い授業を引き続き模索していくことが大切と考えられる。

(報告：佐藤 裕保)

Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

3. 令和6年度 大学院授業評価アンケート調査結果

3.1 前期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

令和6年度前期に開講された科目の内、院生による授業評価が実施された6科目についてまとめた。実施内容・方法は学部と同様であった。得られた結果について、授業評価の各項目の平均得点および全体の平均得点に関して検討した。また、担当者が独自で個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。

(6) 講義科目と演習・実習科目の比較

大学院の授業に関して、特に公認心理師養成の要ともいえる演習・実習科目は重要なものであり、課題等の院生に対する負荷も大きいと考えられる。そこで、授業形態ごとの比較を行った。

図1は授業形態ごと（講義科目と演習・実習科目）の評価点を示したものである。分類した講義科目数は4科目、演習・実習科目数は、2科目であった。講義科目も演習・実習科目も全般的に高い評価であり、特に前年度に比べて評価が低下していた講義科目は、昨年度前期より評価が向上した。演習・実習科目の評価は昨年度前期とほとんど変わらず、講義科目と比較して若干高い評価となっている点も例年通りである。

大学院の授業は受講生数が少なく、評価の変動については原因を捉え、授業に対する理解度や成績評価との関係もふまえて、よりよい授業の展開が期待される。ただし、昨年度入学生から新カリキュラムになっていること、授業評価実施科目数が少ないことは考慮すべきところである。

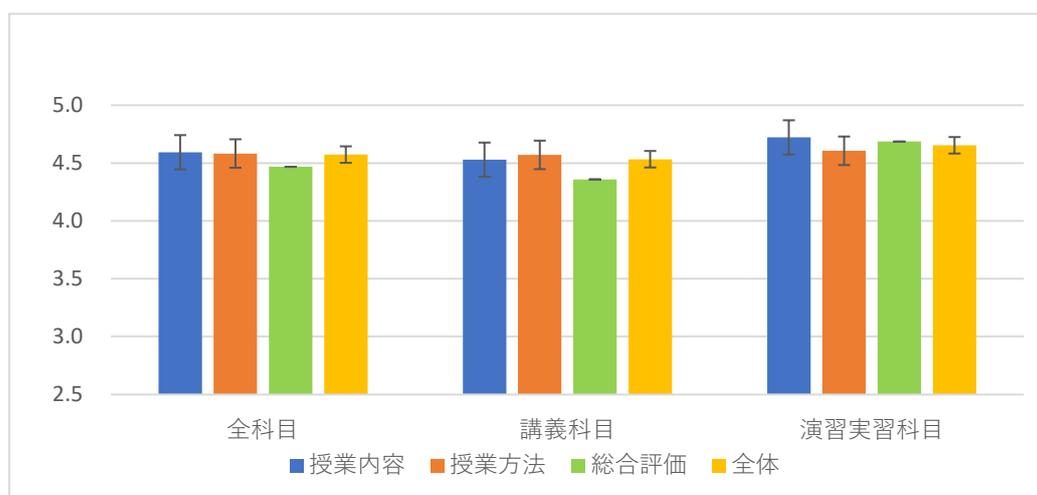


図1 各科目別の平均授業評価点（±SD）

それぞれの科目数は6、4、2科目

（報告：大森慈子）